日本ジオパークネットワーク功労者講演 講師／岩松 暉（いわまつ あきら） 氏

日本ジオパークネットワークの斎藤清一事務局長から、「この頃、ジオパーク認定が自己目的化している向きがあるから、初心に帰らなければと痛感している。ついては事始めと初心について話しをしてくれ。」と頼まれたので、すこしばかりお話したい。

ジオパークは2002年の地質科学国際研究計画(IGCP)科学理事会決議から正式にスタートしている。日本学術会議IGCP小委員会波田重熙委員長がそのオープンセッションに参加されて情報を得、山陰で活動を始められていた。しかし、全国的な動きになったのは2004年NPO地質情報盤備活用機構(GUPI)が設立されてからである。同年6月、北京で第1回ジオパーク国際会議が開催され、参加はできなかったが講演要旨集を入手することができたため、概要をGUPI Newsletter7月号に載せるとともに、ホームページを作成した。この頃はまだ「ジオパーク」ではなく、'geopark'と原語のまま使っていた。その後、geodiversityの訳語をめぐる論争があり、カナ書きで決着した。ジオパークも多分野の協力を得たいのでカナ書きとすることにした。

さて、どうやってジオパークを作ったら良いか見当がつかない。Parkだからまず自然公園を管轄する環境省だと思い、2004年8月のお盆に事務次官を訪ねた。日本ユネスコ国内委員会は文部科学省にあり、地質は経済産業省、観光は国土交通省の所管である。その他文化庁等々、関係各省には話を通しておくようにとのアドバイスを得た。このようにジオパークは数多くの省庁に関わりがあるが、お互いに模様眺めで自ら動こうとせず苦労した。しかし、逆の視点から見れば、全部の省庁の協力を得られるということでもあった。

官庁はともかく、まず何よりも、足下の学界を固めることが先決。お盆の後、産業技術総合研究所に行き、幹部にお願いしたところ、幸いにも快諾され、ユネスコのことだからと、当時国際主幹だった渡辺真人さんが担当となった。こうしたいきさつで渡辺さんがジオパークに関わるようになった。日本地質学会等々の関連諸学会の全面的な協力も得た。

次のステップは社会への発信。講演会を開いたり、講演行脚で全国を回ったりした。PRの一助と思って「日本列島地質百選」など、あの手この手をやってみた。

しかし、広く知ってもらうためには、やはりメディアを動かすことが重要。最初に朝日新聞科学欄が取りあげてくれ、すぐに東京新聞が興味を持ち、見開き2ページオールカラーのサンデー大図解「日本の地質遺産」を作ってくれた。同様の大図解が中日新聞、北海道新聞、西日本新聞などにも載った。これが一大ブレイクのきっかけとなり、地方からの問い合わせが相次いだ。

「中央省庁が三すくみ四すくみなら地方が連携して攻め上(のぼ)ろう」と米田糸魚川市長さんと馬場新温泉町長さんがおっしゃり、2007年10月に発起人会を開き、12月には日本ジオパーク連絡協議会が結成された。地方が結集したら、その半月後の2008年1月にユネスコを管轄する外務省が中央省庁連絡会議を招集してくれた。

一方、審査機構の準備も必要。親しくなった官庁から、「条約でない以上、直接官庁が所管できないので、日本もNGOでどうか。権威のある審査機構も組織して欲しい。それと、政治介入だけは絶対阻止しないとダメだ。一つでも裏口入学を認めたら、このプロジェクト全体が瓦解する。」と言われた。中央省庁は全部オブザーバーとして列席し、決定事項は外務省がユネスコに取り次ぐという第三セクターのような日本型NGOにすることにした。

権威のある審査機構で思いついたのが、当時、京都大学総長だった尾池和夫さん。「この先生は悪い人や、人使いが荒い。」などと言われたが、快諾していただいた。政治介入を防ぐために、委員はアカデミア中心に構成し、審議過程は全部公開して透明性を確保することにした。

話を変えて、初心、私の胸の思いだが、煎じ詰めると、地と人と地方の3つである。

1つめは「地」。2004年にインド洋大津波があった。津波'Tsunami'は英語になっている。地震の後、地震国の日本人が悠然とビデオカメラを回していた。「ツナミだ!」と叫んで逃げていたら、それだけで通じるのだから、多くの命を救えたであろう。一方、津波のないイギリスの少女が津波の危険を母に知らせ、ホテル従業員を避難させたという。こんな事で良いのか、日本列島は災害列島なのだから、地学を国民教養にしなければならないと強く思った。

2つめは「人」。国立科学博物館の「縄文時代の手厚い介護」という展示に強い衝撃を受けた。解説文には、生まれながら寝たきりの小児麻痺児が手厚い介護により天寿を全うしたとあった。あの狩猟採集の時代である。大地の子・縄文人は優しかったのだ。ところが現在はどうか。飽食の時代と言われているのに、親殺し・子殺し・虐待など耳を覆う話ばかり。一億総都会人になって感性が麻痺したのではないか。やはり、子供たちを自然の中で心豊かに育てたいと強く思った。

3つめは「地方」。今の地方は疲弊しきっており、中央の踏み台だ。真の意味の地方主権を実現する必要がある。だからこそ、ジオパークのガイドラインで地元に持続可能な確固たる運営組織があること、という項目の比重が一番大きいのだ。ジオパークには「踏み出せ、汗出せ、知恵を出せ」の三出せが不可欠と思っている。この三出せで育った子供たちは、きっと地元に定着するのではないか。

最後に、ジオパークの設立・運営に当たっての留意点について。2008年に糸魚川ジオパーク推進市民の会設立総会で「5つのキーワード」という話をしたことがある。要は「民主導」「人こそかなめ」「一時的ブームに終わらせない」「協力協働」「郷土愛とおもてなし」の5つである。今でもそう思っている。